

大腿骨骨折後 QOL が低下した重症心身障害者の

意欲を高める関わり

～パソコン操作の再獲得に向けた取り組み～

鹿嶋理絵^{1)*} 山根美恵¹⁾ 福田弘美¹⁾ 圓井和恵¹⁾ 山田成功¹⁾

上田素子¹⁾ 奥田玲子²⁾

1) 国立病院機構鳥取医療センター看護部 5 病棟

2) 鳥取大学医学部保健学科看護学専攻基礎看護学

Initiative designed to help a person with severe motor and intellectual disabilities
whose QOL declined after a femur fracture to increase his motivation

–Ways nurses can handle such a patient in order to regain his ability
to operate personal computers –

Rie Kashima^{1)*}, Mie Yamane¹⁾, Hiromi Fukuta¹⁾, Kazue Marui¹⁾, Naruo Yamada¹⁾,

Motoko Ueda¹⁾, Reiko Okuda²⁾

1) Fifth Ward, Department of Nursing, NHO Tottori Medical Center

2) Fundamental Nursing, Division of Nursing, School of Health Sciences,
Tottori University Faculty of Medicine

*Correspondence: byoutou5@tottori-iryuu.hosp.go.jp

要旨

A 氏は、腹臥位でパソコンのキーボードを操作し、カレンダーの作成や音楽鑑賞をするという趣味があった。しかし、右大腿骨を骨折して腹臥位ができなくなったため、パソコン操作が出来ず、趣味の時間が持たなくなっていた。それに伴い、パソコン操作の再獲得に向けた行動が取れず、苛立つ様子を示す頻度が増えた。本患者のパソコン再獲得に向けた取り組みに関し、A 氏の言動と看護の実際・評価を時系列に分け、バンデューラの自己効力感を参考に、看護師の関わり方を分析した。その結果、本患者の気持ちに沿って、看護師が適切な時期に介入し、成功体験を積み重ねることで自己効力感が高められた。また、重症心身障害者は自ら行動に移すことは難しいため、看護師が患者の思いや方向性を代弁し、周りに働きかけていく必要があることが明らかとなった。鳥取臨床科学 9(1), 32-37, 2017

Abstract

Patient A in this study operated a personal computer keyboard in the prone position in order to create calendars and enjoy music as hobbies. However, after a fracture to the right femur which left him unable to assume the prone position, the patient was unable to operate a computer, which led to the loss of time spent on

hobbies. As no effort was made to regain the ability to operate a computer, the patient showed irritation with increasing frequency. The words and actions of Patient A and the assessment of nursing regarding the initiative designed to help the patient regain the ability to operate a computer were divided in chronological order and the nurses' handling was analyzed based on Bandura's concept of self-efficacy. The results indicated that the nurses provided intervention at the appropriate times based on the patient's feelings and that repeated successes led to increased self-efficacy. Since it is difficult for persons with severe motor and intellectual disabilities to convert their intentions into actions, we identified the need for nurses to communicate patients' thoughts and intentions to others for the patients so that others could do things for the patients. *Tottori J. Clin. Res.* 9(1), 32-37, 2017

Key Words: 重症心身障害者看護, 大腿骨骨折, QOL の向上, バンデューラ (Bandura) の自己効力感, パソコン操作; nursing for persons with severe motor and intellectual disabilities, femur fracture, QOL improvement, Bandura's concept of self-efficacy, personal computer operation

はじめに

穂山¹⁾は、「高齢者や障害者は生き生きと充実した人生を考えるうえでは生きがいや趣味をもって過ごすこと, その対策を立てることが欠かせない。」と述べている。

A 氏は、腹臥位でパソコンのキーボードを操作し、カレンダーの作成や音楽鑑賞をするという趣味があった。しかし、右大腿骨骨折を起こし、骨折後は疼痛や強い恐怖心があり、腹臥位ができない状態となった。そのため、これまで行っていたパソコン操作が出来ず、楽しみであった趣味の時間が持てないでいた。私たちは、骨折前のような楽しみのある生活を送って欲しいと考えていた。

A 氏自身も、「パソコンを使いたい。」と思っている。しかし、長い療養生活の中で獲得したパソコン操作から新たな方法を見つけることが難しく、パソコン操作の再獲得に向けた行動が取れずにいた。そのため、私たちは骨折前に比べると苛立つ様子を示す頻度が増えたように感じていた。このことは、A 氏の楽しみだったパソコンが出来なくなり、自己で気分転換を図れなくなったのではないかと考えられる。パソコン操作を再獲得することで、A 氏は自己で趣味を楽しむことができ、気分転換にも繋がるのではないかと考えた。

A 氏のパソコン再獲得に向けた取り組みに

関し、A 氏の言動と看護の実際・評価を時系列に分け、バンデューラの自己効力感を参考に、看護師の関わり方を分析した。その結果を振り返り、重症心身障害者の看護における患者の意欲を高める関わり方を明確にしたいと考えた。

I. 研究目的

パソコン操作再獲得に向けた取り組みを振り返り、重症心身障害者の看護における患者の意欲を高める看護師の関わり方について検討する。

II. 事例紹介

A 氏: 60 歳代, 男性.

診断・障害名: 脳性麻痺, てんかん, 構音障害, 言語障害, 右大腿骨顆上骨折後.

性格: 繊細で神経質, 物事を悪く考えがち.

骨折前の趣味: パソコンでカレンダーや年賀状の作成, 音楽の取り込み (編集の知識があり操作できる) .

キーパーソン: 母, 面会は 1~2 回/月.

発達状況: ITPA 言語学習能力診断検査結果を示す (表 1) .

看護上の課題: 大腿骨骨折後の気分転換活動不足に対して, 長期, および短期目標を以下のように設定した.